

## 敬和学園大学の歴史（その2）

北垣宗治

### 5. 態勢の建て直し

学校法人敬和学園理事会は1988年11月に設置認可申請を取り下げ、高橋勝・理事長と、野本森萬・敬和学園大学長予定者の辞任によって、最大の試練に直面した。四年制大学を一つ作るということは、決して簡単なことではなかった。貧乏な敬和学園に四年制大学が創れるはずがない、たとえ創れても長続きするはずがないと見ている人もあった。文部省の窓口でも、これで敬和学園は大学設置計画を放棄するだろうと見なしていたふしがある。彼らにとって、稲葉修もと文部大臣からの圧力は、少なからぬ迷惑であったに相違ない。他方、敬和学園高等学校においても、大学設置の動きと連動するかのよう、危機的な状況が高まっていた。

敬和学園高校の教員は、大学設置計画をめぐって大きく二つに割れたのであった。多数の教員は大学設置に次の理由から反対だった。「①大学ができると、高校生は大学進学が保証されたものと考えて、安易に流れて勉強しなくなる。また敬和学園大学に入ることを目的として本校を志願する者が出てくる。②敬和学園高校のキリスト教教育の精神が大学で受け継がれる保証がない。③高校の事務長や事務員が大学設置準備室の仕事に時間を取られ過ぎて、高校の事務に差支えが生じる。④高校がチャペル建設のために集めてきた資金が大学の創設資金に流用される恐れがある。」

しかし高校の初代校長だった太田俊雄は敬和「学園」と名付けることによって、キリスト教主義に基づく総合学園を構想していたのではなかったか。少数ながらも高校教員の中には、大学の設置は高校の質を高め、高校をより充実させていく道であるから、歓迎すべきことだと考えていた。John A. Moss校長もその1人だった。

高校側の反対意見にはもったもな面があった。たしかに高校を経営する同一法人内に新たに短大や大学の設置が計画されると、高校生の中には、これで進学は保証されたものと思いついて勉強しなくなる者がでてくる。それを防ぐには高校としての慎重な工夫と決意が必要であった。敬和学園高校のキリスト教教育は全国から注目されるほどの独自性を備えていた。敬和学園大学はいったいどのようなキリスト教教育のプログラムを持つのか、高校に対

してそれが十分に示されたことはなかった。(野本学長予定者は高校に説明に行っても、大学設置に反対の教員だけが出てきて、十分に聞いてもらえなかった、と理事会に報告している。) また、大学設置準備室の人手が不足しているからといって、高校の若槻清文事務長に準備室の仕事をさせることは、たしかに望ましいことではなかった。しかし法人内部での準備室の位置付けは曖昧であり、準備室といえども金銭の出納には事務長の印を必要とする時期があった。また高校の助けを借りずに大学のための募金運動を進めることは不可能であった。高校がチャペル建設の悲願を達成するために苦心して集めていた1億2,000万円近くの金を、理事会が一時的に大学の創設費にまわす措置を取ったことは、高校に大きな不安と不満を与えていた。高校のモス校長は大学設立に賛成の立場ではあったが、この「チャペル資金」の一時立て替えについては疑念を払拭しきれなかった。その上さらに、大学教員の給与体系は、国立大学における大学教育職俸給表に基づき、それを二号俸アップしたものを適用する、という方針が洩れ伝わったとき、高校教員たちの怒りは最高潮に達した。そこまでしなければ敬和に来てくれないような教員は断るべきだ、と主張する先生もいた。しかし常任理事会では、それほどまでの待遇を示さなければ、新潟県の阿賀北にまで優秀な教員を惹きつけることができないという事情があった。大学設置計画が高校教員間に分裂を招いた時期は、不幸にして教員たちの道徳的水位が下降し、高校が開校以来の危機を迎えた時期でもあった。1990年1月教頭に就任した安積力也氏(現、恵泉女学園中学・高等学校長)は「内部崩壊の危機と不信の渦の高まる中」に就任したと書いている(『敬和』354号、2003.9)。モス校長は太田俊雄初代校長の退任後、次の日本人校長が決まるまで臨時代理の役割をはたすつもりで校長に就任した人であったから、この状況を深く憂慮し、1日も早く、有能な日本人校長を選んでほしいという意向を理事会に伝えていた。

もともと敬和学園は新潟市内の二つの大きなプロテスタント教会が中心となって、両者が協力して支えてきた学園である。どちらも日本基督教団に所属するが、長老派の伝統に立つ東中通教会と、組合派の伝統に立つ新潟教会という、両者の協力なしには敬和学園高等学校が誕生し、成長していくことはできなかった。大学設置に向かって動き出した当時東京の番町教会の高橋勝牧師が学校法人敬和学園の理事長であったのは、東京に移るまで新潟教会の牧師だったことによる。野本森萬教授は東中通教会の長老であった。大学設置における最初の躓きからくるこの危機的状況を打開するため、理事たちは何度も集まり、何度も祈り、新しい理事長に京都世光教会の後宮俊夫(うしろく・としお)牧師を選んだ。後宮牧師は海軍兵学校の出身で、帝国海軍

の士官として祖国に生命を捧げるつもりで戦い、ソロモン沖海戦で瀕死の重傷を負いながらも、九死に一生を得た人であった。敗戦後の深い反省に立ち、一転して、キリストに生命を捧げることに活路を見出し、神学校に行くことなく、独学で牧師となった。後宮牧師に決定的な影響を与えた榎本保郎牧師のあとを引き継いで世光教会の牧師となり、見事な牧会によって世光教会を京都南部の雄に育て上げた。その後1960年代後半から70年代にかけて教区総会も開けないほどに荒れていた京都教区で総会議長を務めたのちに、日本基督教団総会議長に選ばれ、信仰と決断と蛮勇をもってしか乗り切ることのできない教団総会議長職を10年間（1978-1988）も務めた人であり、若い牧師たちから尊敬されてきた。新潟の牧師たち、特に新潟教会の春名康範牧師と十日町教会の松井愛美牧師は、「日常的なことや下働きはすべて私たちがやりますから、どうか敬和学園理事長を引き受けて下さい」といって口説いた。後宮牧師としては、10年間にわたる教団総会議長の激職から解放されて、やっと世光教会本来の仕事と取り組めると喜んだのも束の間、敬和学園からの要請を主のご命令として受け止めたのであった。

後宮新理事長はさっそく新しい学長予定者と、新しい校長を探さなくてはならなかった。どちらも簡単な問題でなく、一時は野本教授にもう一度学長予定者をお願いする話が出、教授もその気になったことがあった。しかし文部省の窓口は非公式的ではあったが、野本先生では望みはありませんよ、と準備室職員に洩らしており、やはり新人を探さざるを得なかった。その結果、同志社大学神学部の深田未来生（ふかだ・みきお）教授が指名された。深田はメソヂスト系のミッションから派遣された宣教師で（モス校長もメソヂスト系の宣教師である）、日本では自由学園、アメリカではやはりメソヂスト系のベイカー大学とボストン大学で教育を受けた。日本語と英語を同程度に、歯切れよく、ぱりぱり話す人だった。京都の上賀茂伝道所で活気に満ちた牧会を展開していた。同志社ではキリスト教教化学や実践神学などを担当、西陣労働センターのようなキリスト教社会事業にも経験があり、夫人はYWCAで活躍するアメリカ人女性。キリスト教信仰、国際主義的背景、リーダーシップ、しかもまだ55歳、どの点から見ても、学長として適任であると考えられた。深田は受諾した。

学長予定者として京都から新潟入りした深田教授は、先ず人文学部長予定者だった新潟大学の伊藤豊治教授の研究室まで挨拶に行った。新潟大学を古巣とする菊地次郎課長が案内し、後宮理事長、春名康範理事も同席した。伊藤教授は都合で参加できなかったが「過日伊藤教授から、拙著『私の終わりに私の初めがある』43ページ6行目に、伊藤教授も参加したとあるのは誤

りであることをご指摘いただいた。お詫びして訂正します]、1989年1月24日、五頭山麓のログ・ハウスに深田学長予定者、田原嗣郎・国際文化学科長予定者、後宮理事長、常任理事が集まり、泊りがけで自由な雰囲気の中で初会合を持った。前年における申請取り下げまでの経緯を反省し、新しい学長予定者のもと、どのような方針で仕事を進めるかが話し合われた。田原教授は文部省に提出する科目表に記載した諸科目の定義を短時間で「作文」した話や、文部省での交渉に参加した感想をも含めて話し、自分が危惧する点について率直に指摘した。田原教授はその日の顔合わせを「まことに気持のよい一日」だったと回想する。他方、京都から意気込んで新潟に乗り込んでいった深田は、どうしたわけか、自信を喪失している自分に気が付いた。田原、伊藤教授らとの年齢の差もさることながら、国立大学の先生たちと、まったく私立学校だけで育ってきた自分との間には、考え方、感じ方に大きなギャップがあることを否定できなかった。その上彼の肉体はガンとの戦いで一進一退の状況にあった。健康面でも自信を失った深田は、緊急入院した機会に、学長予定者を2か月で投げ出してしまった。

後任の学長予定者がなかなか決まらない敬和学園理事会は、大学の誘致者である新発田市からもさかんに尻を叩かれ、剣が峰に立たされた。ついに松井理事の発案で、同志社大学文学部の北垣宗治（きたがき・むねはる）教授に交渉することになった。北垣にとってそれは、寝耳に水であった。引き受けるにしろ、断るにしろ、一度現場を見てからにしたい、と彼は回答した。後宮理事長と春名理事は同志社大学に急行して北垣を訪ね、学長就任をあらためて要請した。2人は翌日、空路、北垣夫妻を新潟・新発田に案内した。1989年2月15日、後宮、春名、北垣夫妻の4人が新潟空港に降りたとき、空は輝くばかりに晴れ渡り、空港に出迎えたモスはつみ夫人（敬和学園高校英語科教諭）は、「ご覧の通り、お天気までが先生方を歓迎していますよ」と述べた。

北垣夫妻はただちに太夫浜の敬和学園高校に連れていかれ、モス校長、川嶋宣彦教頭、堀川勝愛寮長の3人に挨拶した。堀川氏の反応は「先生は火中のクリを拾うことになりますよ」という、前途の困難を暗示する表現だった。それから新発田市大字富塚三賀境の大学用地を訪れた。田圃のまん中に造成された、約1万5,000坪の矩形の土地があった。新々バイパスはまだ完成しておらず、バイパスの盛り土の上から校地を眺めてみても、はたしてそこにどのような校舎が建つのか、見当もつかなかった。盛り土の上で記念撮影したのち、新発田市役所に行き、近寅彦市長に挨拶した。市長は北垣がもう学長予定者を引き受けたつもりでにこやかに歓迎の言葉を述べた。夕方、新潟

空港で、北垣は後宮理事長と春名理事に受諾の意志を伝えた。

北垣は大学の設立と運営に自信があるわけではなかったし、自分は学長のウツワでないと考えていた。彼はその時59歳、17世紀、18世紀の英文学を専攻し、スコットランドの University of St. Andrews、アメリカの Amherst College、首都ワシントンの Folger Shakespeare Library、そして Harvard 大学で留学ないし在外研究した経験があり、英米の高等教育について或る程度の知識と見識を備えていた。同志社大学の出身であり、同志社設立の中心人物、新島襄について研究を進めており、『新島襄全集』編集にもたずさわってきた。松井理事が深夜に「敬和学園大学の学長をどうかぜひ引き受けて下さい！ もはや先生しかお願いする方がありません。私たちを見殺しにしないで下さい！」と、悲痛な声で電話してきたのは2月12日夜11時ごろのことで、これは偶然にも新島襄の誕生日だった。北垣は新島がその晩年において、新潟県下の伝道のためにいかに祈り続け、同志社の卒業生でそれぞれ25歳だった、新潟教会の広津友信、新発田教会の原忠美、長岡教会の時岡恵吉を激励してやまなかったかということを知っていた。新島の弟子たちが必死になって播いた種子が百年後に結実するのが敬和学園大学ではないのか。そう思えば、敬和学園からの要請を無碍に退けるわけにはいかない。北垣の決意の背景にはそのような思いがあった。

大学設置準備室は1989年2月初めに、新潟市小金町から新発田市中央町の産業会館二階の事務所に移ってきていた。これは、新発田市に大学を創るのに、設置準備室が新潟にあるのはおかしいという、新発田市議会議員の抗議に答えるかたちで、新発田市があっせんしてくれた事務所だった。狭くて応接室もない、殺風景な一室だったが、総勢で9人の職員は不平もこぼさずに職務に精励した。野本、深田の後を継いだ北垣は、学長予定者であると同時に、大学設置準備室長でもあった。2月の段階で職員の体制は相馬六次長（新発田市大学誘致促進事務局長）、菊地次郎総務課長、今村正博財務課長（新発田市から出向）、神田礼輔（聖籠町から出向）、長澤雄介（募金担当）、藤井真理、田辺昌邦、鶴巻房子（会計）、長澤広子がいた。藤井真理はワープロに誰よりも堪能であり、文部省に提出する膨大な書類をほとんど1人で打ち出した。もと敬和学園高校の会計係だった鶴巻房子は準備室で複雑な学校法人会計の仕組みをいち早く理解し、当時理事会での予算の説明は彼女の役目であり、文部省の窓口でも彼女が予算の説明をした。

北垣学長予定者は敬和学園常任理事を兼ねることになった。常任理事会というのは、全体の理事会を何度も開くわけにはいかないのので、数名の「常任理事」をきめて、彼らがしばしば集まって仕事を進め、のちほど全体の理事会

の承認を得るという実働体制であった。当時の常任理事は後宮俊夫(理事長)、春名康範(新潟教会牧師)、松井愛美(十日町教会牧師)、小淵康而(新潟信濃町伝道所牧師)、高橋稔(中条教会牧師)、北垣宗治(学長予定者)の6人だった。北垣は常任理事会が開かれるごとに京都から空路、または特急の夜行寝台車「つるぎ」を利用して新潟または新発田に、平均すると週に2回赴いた。彼には1990年3月末まで同志社大学教授としての仕事が残っていたので、新発田市への転居は1990年4月まで待たなくてはならなかった。

北垣が学長予定者として、はじめて学校法人敬和学園の理事会に紹介されたのは1989年2月27日、新潟会館においてであった。その日は新潟空港から直接会場まで連れていかれた。春名理事は、理事会が始まるまで2時間あるので、この時間を利用して学長予定者としての「敬和学園大学のヴィジョン」を書いてほしい、別室を用意するから、と言った。これは北垣にとって、予告なしの学長試験のようなものであった。どうやらその背後には敬和学園高校の教員たちに、北垣の大学理念を示して、できれば少しでも不安を沈静化したいというモス校長の要望があったらしい。(この時、北垣が苦しまぎれに書いた文章の全文は『私の終わりに私の初めがある』pp. 46-48を参照されたい。)春名理事は北垣の「答案」に3ヵ所だけ挿入することを示唆したので、北垣はそれを受け入れた。一つは「心の教育」という、やがて大学の学則第一条にも入ることになるフレーズで、敬和学園教育の最重要ポイントであるという見解だった。もう一つは「異文化」という単語で、当時の北垣にはまだ使い慣れない言葉だった。その日の理事会で北垣はそれを朗読することを求められた。彼はその中で六つのポイントを示した。

1. キリスト教主義教育の堅持
2. 国際主義教育、とくに「環日本海文化」研究プログラムの方向付け
3. 英語をはじめとする外国語教育の重視
4. コンピューターを全学生が使えるようにする態勢
5. 21世紀をめざすリベラル・アーツ教育
6. 留学生の受け入れと、社会に開かれた大学の構築

北垣は「ヴィジョン」を次のような言葉で結んだ。「敬和学園大学のヴィジョンを単なる夢に終わらせてはならない。そのような大学を一挙に創り出すことはできないが、時間をかけ、経済面で努力し、有能な人材を集め、世界と日本社会の動きをたえずグローバルな眼で見つめていけば、神は必ずわれわれの夢を実現させて下さるものと確信する。」

この文書のコピーは敬和学園高校の全教員に配布された。これに対し、守屋秀洋教諭から、北垣のヴィジョンでは文化面は大変強調されているが、

「情報のセンター」としての大学構想が不明確である、との建設的なコメントが届けられたので、この点には特に注意しながらカリキュラムの見直しを進めることにした。また環日本海研究については藤田英忠教諭から、日本海の魚類の研究はもうし尽くされているので、やるならば渡り鳥の研究であろう、とのコメントがあった。

大学設置準備室では新しい学長予定者をなるべく早いうちに文部省に紹介する必要があった。北垣は3月7日、3人の職員、相馬六、今村正博、神田礼輔に伴なわれて東京に行った。先ず砂防会館に地元選出の稲葉修代議士を訪ねた。着物姿で車椅子に乗った代議士はにこやかに北垣を迎え、握手して激励の言葉を述べた。そして、「文部大臣に会っておきなさい」と言って早速電話でアポイントメントを取りつけた。次に4人は飯田橋の私学振興財団を訪れて挨拶した。敬和学園大学のための寄付金はすべて私学振興財団に寄託される仕組みになっていたからである。財団助成部助成第二課の飛田隆三課長はかつてこの財団の常務理事だった上野直蔵教授（同志社大学における北垣の恩師）のことをよく覚えていた。約束の時間がきたので文部省へ行き、大臣室で西岡武夫文部大臣に挨拶した。敬和学園大学を設置したい理由の一つとして、新潟県は大学進学率が前年度 19.3%で、全国一の低さであることを北垣が指摘したところ、大臣は首をかしげ、そんなことはない筈だ、と言い、相馬次長と大臣の間で議論になりかけたとき、次の来客があり、大臣室を辞去することになった。次に高等教育局私学部を訪ね、準備室で用意した書類を前にして砂賀功・私学行政課専門員から約1時間にわたり「指導」を受けた。「特色あるカリキュラムのもとに、優れた先生を確実に集め、途中で変更のないように」というのが基本原則だった。このあと高等教育局企画課の坂東久美子・課長補佐にも紹介された。坂東補佐はそれから2年近く、北垣学長予定者に対して企画課の窓口を務めた人であった。慎重で、親切で、決して声を荒げることのない人だった。この日を最初として、北垣が1989年の年末までに文部省に足を運んだ回数はちょうど20回であった。

それから何か月か経て、北垣はもう一度文部大臣室を訪ねている。これは稲葉修代議士の肝いりによる集まりで、代議士としては敬和学園大学のことをさらに一層西岡大臣に印象付けておきたかったことと、もう一つは子息の大和氏（現、新潟三区選出衆議院議員）を西岡大臣に紹介する目的もあったらしい。その会見には新潟県の金子清知事、近寅彦新発田市長、伊藤永寿聖籠町助役、後宮理事長も立ち会うという大掛かりのもので、すべては稲葉代議士のイニシアティブで運ばれた。

北垣が後宮理事長から渡された最初の書類は、B5版3ページから成るも

ので、それは1988年の申請のときに作られた専任教員一覧表だった。学科名、職名、氏名、年齢、就任年月、現住所、電話番号、備考の欄に分けて、32人が並んでいた。専任教員は「一般教育」「英語英米文学科」「国際文化学科」のうちのどれかに所属していた。職名はもちろん教授、助教授、講師。就任年月とあるのは、昭和65年4月、66年4月、67年4月のどの時点で就任するかを示すもの。欄外に○×の印があり、その意味は、後述するように、敬和学園大学の開学が1年延期となったがなお敬和に来る事を内諾した人は○、辞退した人は×ということであった。この×印の後任を探すことが、学長予定者の最も重要な仕事であった。このリストにはどういうわけか、担当科目の記載がなかった。そこで北垣は菊地課長に聞いて、担当科目を欄外に記入していった。それはどういう科目の担当者を探すべきかを知るための作業だった。

専任教員一覧表を繰り返し読んでみて、北垣には一つの疑問が浮かんできた。それは、キリスト教主義大学である筈の敬和学園大学で、いわゆる宗教教育をどのように実施するつもりだったのか、という問題である。菊地次郎、長澤雄介の両氏ともそれは聞いていないと言う。神学者の深田教授であれば、キリスト教教育の先頭に立つことができるだろうが、英文学者の北垣にはとうていできない。一覧表の中にもし候補があるとすれば、それは国際基督教大学出身で英国のダラム大学で博士号を取った新約聖書学者の山田耕太（助教授予定者）かもしれない。それを確かめるには野本教授に直接聞くのが一番早い。前任者から学長予定者の引継ぎを受けてもいなかった北垣としては、どれほどくやしい気持ちを抱いているかもしれない前前任者に会いに行くことはためらわれた。北垣は次善の策として、国際基督教大学の讃岐和家教授にその点を確認にいくことにした。

2月20日の夕方、北垣は讃岐教授を訪問して敬和のチャプレン問題について質問したところ、山田氏は新約聖書学者ではあるが、多分チャプレンとして推薦されたわけではないと思う、詳しくは国際基督教大学の宗教部長兼大学教会牧師である古屋安雄教授に確かめるとよい、という答であった。翌日古屋教授に会い、山田氏はチャプレンとして推薦したわけではないとの確答を得た。北垣は哲学の担当者を探すことになっていた。哲学の先生で、同時にチャプレンを務めることのできる人の推薦を、同志社大学の竹中正夫教授に要請した。こうしてクレアモント神学大学院の延原時行博士が敬和に紹介されることになった。ついでながら、讃岐教授訪問の副産物として、国際文化学科で新味を出すのに「環日本海文化研究」のアイディアが有効だという示唆を得たことだった。北垣は幼年期、少年期に日本海の波の音を聞



きながら育ったのであり、同志社大学の同僚だった森浩一教授の仕事に刺激されて「環日本海文化」には関心があったが、讃岐教授の言葉に大いに励まされた。2月27日の「学長試験」の答案には、その辺のことが反映しているといっただいである。

事務室の職員の中には大学設置申請の実務経験者がいなかったの、文部省に或る程度顔の利くような人を入れる必要があるとの考えから、北垣はキリスト教学校教育同盟の神崎寿枝主事に相談の上で、甲府市に引退していた仙沢計美（せんざわ・かずみ）氏を準備室長として担ぎ出すことにした。仙沢は山梨英和短大、群馬県高崎の新島学園女子短大、滋賀県の聖隷学園聖泉短大といったキリスト教系の短期大学で、それぞれの設置申請事務にたずさわって、事務長を経験してきたのみならず、ほかに何十校にもものぼる設置申請に参画したベテランだった。北垣は聖泉短大に非常勤講師として出講していた頃、仙沢が同短大の事務長だったことを思い出した。北垣の願いを受け入れて仙沢は準備室長を快諾し、単身赴任のかたちで新発田のアパートに入り、5月8日に就任した。仙沢は甲府教会所属のクリスチャンでもあり、事務局の中枢に座る関係から、敬和学園の常任理事をも依頼された。

大学設置準備室は大学が出発すればそのまま大学の事務局に移行する。文部省はこのことを何度も念を押した。新しい職員人事の手始めに、図書館職員の予定者として、図書館司書資格を持つ松原洋子（滋賀県大津市出身）を採用した。彼女は図書館の実務経験はなかったが、さっそく就任予定の教員たちから寄せられた図書リストをまとめ、開学時に1万8,000冊の図書を揃える仕事に取り掛かると同時に、自分で計画を立てて、母校の帝塚山大学や鶴見大学の図書館での見学と実習に出かけた。

大学図書館ができる前に、1人の篤志家から貴重な蔵書の寄贈を受けることができたことは幸いであった。近寅彦市長の新潟大学医学部における恩師だった小宅洋名誉教授は世界の言語に興味を持って本を集めて来た人である。小宅教授はオクスフォード英語辞典13冊と補遺4冊、ギリシア語英語辞典、ヘブル語英語辞典、イーディッシュ語英語辞典、ヘブル語カルデア語辞典、日葡辞書以外に、17種類の各言語の聖書（ギリシア語、ラテン語、イタリア語、スペイン語、ドイツ語、オランダ語、スウェーデン語、ノルウェー語、アラビア語、ポルトガル語、ロシア語、フランス語、中国語、朝鮮語、エスペラントを含む）を敬和に寄贈された。図書館ではこれらの聖書をガラスの戸棚に保管・陳列して今日に至っている。小宅教授に続き、何人もの篤志家が図書館の充実に寄与して下さったことを感謝をこめて記しておきたい。

一方敬和学園高等学校長人事も難航した。高校内部には適当な候補者がな

いということで、候補者選定を一任されていた後宮理事長は、春名理事の推薦を容れ、札幌の榎本栄次牧師に白羽の矢を立てた。榎本氏は「チイロバ先生」と呼ばれたユニークな伝道者榎本保郎牧師の弟であり、この兄の強烈な影響のもとに伝道者となり、札幌の何もないところから開拓伝道を始め、札幌北部教会という立派な教会を育て上げた人である。後宮理事長の義弟でもあり、理事長は無理を承知の上で、榎本氏に校長就任を要請した。1回目はことわられたが、敬和学園高校のことを思えば簡単に引き下がるわけにいかず、再度泣き落としに参上して承諾を取り付けたという。榎本氏は悲壮な決意のもとに新潟入りをした。理事会が押しつけた校長というイメージを払拭するために、榎本氏は信仰の原点に立ち返り、一人ひとりの生徒を大切にすることと、教育をなさるのは神であるという考え方を中心に置いた。1990年4月に就任した榎本校長が最初に手をつけた仕事は、「乱雑なまま放置されていた寮のゴミ捨て場を、自らの手できれいにすることだった。黙々と、誰に言うでもなく、されていた。」(安積力也、『敬和』354号)

このようにして敬和学園は、1989年2月に新しい学長予定者を、そして1990年4月に新しい高等学校長を任命することでもって、態勢の建て直しを終えた。

## 6. 第一次申請をめざして

新発田市中央町にあった産業会館の大学設置準備室では、仙沢室長が、1989年7月31日の第一次申請書提出日までの日程表を作ってはりだし、書類作りを督励した。仙沢は準備室の誰よりも達筆であった。すでに前年に設置申請をしたことではあり、どのような書類が必要であるかは職員たちにわかっていた。「予行演習」は終わっていたとはいえ、申請書の内容は改善されたものでなければならない。文部省の窓口は、前年の申請書の内容を変更した箇所については、何故変更したのかと質問し、変更しなければなぜ変更しないのかと、執拗に問い続けた。ことに私学行政課の指導は辟易するほど厳しいものだった。なぜあれほど厳しかったのだろうか。それは比喩的に言えば、一旦認可されたなら、簡単には倒れないよう、足腰をしっかりと鍛えておくためであったと言ってよいであろう。学長予定者の仕事とは、文部省と、ヤコブのように格闘することだったのである。

常任理事会は先ず敬和学園大学の学則の再検討に取りかかった。このために青山学院女子短期大学長を長らく務め、当時恵泉女学園大学副学長だった幸田三郎氏を理事に迎え、幸田氏のコーチのもとに学則の見直しをした。常任理事会は学則の中で最も重要な第1条(目的)には特に時間をかけて討議

した。最終的に落ちついたのは「本学は、教育基本法及び学校教育法に従い、福音主義キリスト教の精神に基づく自由かつ敬虔な学風の中で真理を探究するとともに心の教育を実践し、国際的教養豊かな良心的人材を養成することを目的とする」という文言だった。幸田理事は、あまりたくさんの徳目をごたごたと並べるべきではないという意見であった。春名理事は「心の教育を実践し」という一句をどうしても入れることを主張した。第1条は妥協の産物ではあるが、「国際的教養豊かな良心的人材」を養成するという目的は、ゆるぎのないものとして、敬和学園大学に据え付けられることになった。

時を同じくして「学長選任に関する規程」が作られた。初代学長はまだ教授会が成立していないのでこの規程によらず、理事会が任命したのであるが、設置申請にはこうした規程以外に、「大学教員選考内規」「大学教員の定年に関する規程」「教授会運営内規」等を付けて提出することを求められた。敬和学園大学では教員の定年を70歳と定めた。ただし設立時に66歳以上の年齢で採用した人については75歳まで延長できるとした。この特典の適用を受ける人は4人あった。設立時65歳ないし64歳だった人々（つまり「大正生まれ」の人々）には、それぞれ74歳、73歳までの定年延長を認めることにした。学長には定年の規程が適用されない。

敬和学園大学にとって、また北垣学長予定者にとって幸いであったことは、野本初代学長予定者が確保した優秀な人材の大部分を、そのまま引き継ぐことができたことである。新潟大学の理学部長経験者であった野本教授は、もとの同僚である理学部の金子哲夫教授（統計学）、文学部の伊藤豊治教授（英文学）、教養部の安藤弘教授（古代ギリシア史）以外に、日本文学の教授と経済学の教授の就任約束を取りつけていた。当然のことだが野本としては新潟大学が教員候補を最も見つけやすい場であったに違いない。人文学部の赤沢教授も、野本に非常に協力的であった。しかし敬和学園大学を新潟大学の出先機関にしてしまわないよう、野本は節度を守った。野本はさらに自ら東京まで出かけ、西早稲田のキリスト教学校教育同盟にも足を運んでクリスチャンの先生を得ようとした。また国際基督教大学の讃岐和家教授を介して、英文学担当者を捜し求めた。讃岐教授は東大の斎藤真教授の紹介で平井正徳教授に要請し、平井教授は東大の川西進教授に英文学の教員の推薦を求めた。野本は同様な要請を日本女子大の新井明教授にもしている。新井教授から同志社の北垣にまで電話がかかり、「誰か英文学で適当な人はいませんか」という問い合わせがあったのはこの頃（1988年）のことである。新井教授はキリスト教関係図書を出版していた「すぐ書房」の有賀寿社長から紹介された、佐賀在住の優秀な新約聖書学者、山田耕太氏を敬和に推薦した。また国際基

督教大学で助手をしていた、新潟県西山町出身の西村秀雄氏を敬和に推したのは、西村氏の恩師で、一時期敬和学園大学人文学部長予定者に擬せられていた渡辺正雄教授だった。渡辺教授は顔の広い人で、この外にもたくさんの候補者を野本に取り次いだ。外に高橋勝理事長は母校同志社の藤代泰三教授から推薦された何人かの候補者名を野本に取り次いだ。

前年に涙を飲んで設置申請を取り下げたとき、1990年4月の大学開学時に就任する予定だった教員たちに対して、準備室は理事長名で1989年1月30日付による報告とお詫びの手紙を送り、1年間延期して1991年4月の開学をめざすことになったが、ぜひとも1年間お待ち頂きたいこと、しかしお待ち頂けない方については、残念ながらやむを得ないと考えていることを伝えた。これに対して、32人の就任予定者のうち26人から内諾の返事があった。しかし何人かは就任を辞退した。1人については家族から死去の連絡があった。2人の長老教授が返事を何か月も引き延ばして準備室を困らせた。しかし多数の若い人たちは1年間忍耐して待つ決意をしたのであった。

文部省の窓口は、敬和の提出した教員リストを点検して、60代と30代の教員が多すぎるから、もっと年齢的にバランスを取ることと、32人のうち過半数の17人は教授を確保するよう示唆してきた。非常勤講師の人数にも制限があったため、音楽・音楽史を採り、美術・美術史の方はカットせざるをえなかった。さらには教員予定者の中に、大学で教えた経験のない人が多いことも文部省が指摘したので、北垣と仙沢は手分けして、1年間待つという意味表示をした2人の専任予定者と、若干名の非常勤予定者を訪問し、就任辞退を要請した。これは非常に辛い仕事であったが、教員人事での失敗は許されないので、こうした「荒療治」もやむをえないことであった。

当時学長予定者と準備室職員は月に2回くらいの割合で文部省に赴き、大学の設置認可申請書作成の「指導」を受けていた。重要なやりとりをする場合には京都から後宮理事長にも出席を要請した。学長予定者や理事長が顔を出さないでいると、その学校法人には大学設立の意欲がないと見なされそうな雰囲気文部省の窓口にはあった。カリキュラムと教員人事については高等教育局企画課が、寄附行為改正、理事会関係、予算、土地建物関係等については私学行政課が対応してくれたが、文部省の窓口は時として人が変わることがあり、窓口を務める役人たちの間では指導の仕方にも必ずしも首尾一貫性があるとは限らなかった。また設置基準そのものにも微妙な変化が現れ始めていた。一例を挙げると、体育館の問題がある。1988年に高橋理事長の下で申請したときには、体育館はあるに越したことはないが必要不可欠でなく、新発田市と聖籠町の体育施設を借用して体育の授業を行うという方針で問題

はなかった。ところが申請事務が1989年6月にさしかかったとき、私学行政課の窓口（森重信事務官と岩根靖治係長）は、大学設置基準で必須としていなくても、体育館の有無は問題になる可能性が強いことを指摘するに至ったのである。

森、岩根の両氏は、①今回の申請で体育館建設の計画を見送れば、たとい財源の余裕が生じたとしても、また篤志家から寄附の申し入れがあったとしても、1995年までは建設するわけにいかないこと（大学の設置が認可されるということは、最初の4年間の予算が認可されたということの意味し、予算を中途で変更することができないという、大学設置のルールによる）、②秋に予定される大学設置・学校法人審議会のヒアリングで、委員から体育館建設について質問されたとき、敬和ではどのように対応するのか。すでに創設資金に余裕がないのだから、申請を取り下げざるを得なくなる可能性がある。③体育館は福利厚生施設であり、学生の期待に沿うためにも必要であるから、体育館は必須と考えるべきであろう。以上三つの理由から、敬和の体育館は焦眉の急を要する問題として浮上してきた。7月に入ると、体育館を持たない大学は認可すべきでないということが、私学行政課内部での大方の意見であることが告げられた。大学設置認可の権限は大学設置審議会にあるとはいえ、こういう場合役人たちの意見が重きをなすことは否定できないことであった。

準備室は7月5日に、前日の文部省とのやりとりを新発田市長ならびに聖籠町長に報告し、市と町の協力を要請した。これに対して市と町は、この時点で建設費を助成するわけにはいかないが、市・町にある既設の施設を提供する方向で考えてみよう、との答であった。候補に上がったのは新発田市から①産業会館（旧体育館、当時の準備室が置かれていた建物）、②新発田中央高校体育館（1991年8月に高校は曾根地区に移転の予定だった）、③市立第一中学校体育館（新しい体育館を建設したので不要となったもの）、聖籠町から④聖籠町公民館であった。準備室ではこれらの候補施設を十分検討した結果、市立第一中学の体育館を選んだ。

しかし文部省の見解はさらに厳密なものであった。森・岩根の両氏は、体育館は申請時まで敬和学園の財産となっている必要がある。1991年3月の時点で学園の財産となるということではだめである。市議会にかけて債務負担行為を行い、将来に向けて学園の財産となることを確約しておく必要がある。校舎用地の借地権契約についても同じ手続きが必要である、というのであった。これに対して準備室は、「普通財産の譲与・貸与は市条例で市長の権限に属している事柄であるので、市議会に附議する必要はない。市長と学園

理事長の間で譲与または貸与の契約を締結すれば、その時点から効力が生じるものと考え」と答えた。準備室としては、上記の準備室見解が正しいと確信していたし、藤倉庄平新発田市助役も準備室見解を支持したが、念のために、7月25日の臨時市議会に上程して、新発田市は敬和学園に対し体育館は譲与し、土地は貸与することを決議したのであった。

前年度に申請したとき、校舎の建築について、野本学長予定者は新潟の丸運建設に依頼するつもりであった。丸運は敬和学園高校の建築を手がけてきたし、役員の中には東中通教会員がいた。しかし、これは文部省との折衝が進むにつれて、できない相談であることがわかった。敬和では大学のためにすでに丸運建設から800万円もの寄付を受けていた。ところが、寄付をした建設業者に建設させることはできない、というルールがあることがわかったのである。これでは、寄附をしたばかりに仕事をさせてもらえないということであり、まことに奇妙な矛盾であった。常任理事会は丸運に鄭重な詫びを入れたのち、設計を東京のヴォーリス設計事務所に依頼することを決めた。ヴォーリスはキリスト教系の学校や、教会堂を数多く手がけてきた設計業界の名門だった。

当時札幌在住で、国際文化学科主任予定者だった田原嗣郎教授から、西向きの研究室棟は陽光が書物やコンピューターをだめにするので、注意してほしいとの要望があり、研究室棟の西側は、三角形にすることによって、陽光を避ける工夫がなされることになった。常任理事会の認めた設計原案（講義棟Ⅰ、講義棟Ⅱ、研究室棟、本部事務棟、食堂棟）を提示した上で、建設業者を対象として入札に入った。結局新発田市の指導により、新発田・聖籠の四つの建設会社、すなわち新発田建設、岩村組、伊藤組、石井組がジョイントを組んで工事に入ることになった。ジョイントのまとめ役は大学から一番近い場所に本社がある新発田建設が担当した。当時新発田建設の専務だった渡辺幸二郎氏は熱心なカトリック教徒で、キリスト教の大学が地元でできることを大いに歓迎した一人だった。（渡辺氏はその後新発田建設の社長になったが、社長職に従事するかたわら刻苦勉励して、新潟大学大学院工学研究科に学び、ついに博士（工学）の学位を取得した。後述のオレンジ会では2代目の会長として、いまなお敬和学園大学の最も有力な支援者である。）

最初、野本学長予定者は9億円で大学はできる、と主張していた。しかし準備室が大学設置基準に従って土地、建物、什器備品、図書、人件費等をつめていくと、人文系四年制大学で収容定員800人の敬和学園大学の場合、最低20数億円が必要であるということになった。このうち、地元の新発田市では抵抗する市議会をなだめつつ、なんとか11億9,756万円、そして聖籠町

が4億4,175万円を負担することが決定した。敬和は4億円近くを自己資金として示さなくてはならなかった。4億円の募金は先ず不可能であったから、理事会は、高校のチャペル資金1億1,983万円を「一時的に」大学創設資金にまわすことをきめたのである。したがって準備室としては2億8,000万円を集めなくてはならなかった。（高校のチャペル資金はのちほど高校に完済され、高校チャペル建設に用いられた。）

文部省の窓口では寄附行為の文言、校地が正当に取得されているかどうかを示す書類、カリキュラムに矛盾がないかどうか、といった点だけでなく、創設資金の中に借金や、汚れた金や不正な金が含まれていないかどうかに至るまで、書類の一枚一枚を入念にチェックした。すなわち寄付者リストを見ながら、100万円以上の個人または企業の寄付者に印をつけ、これらの個人には銀行の残高証明を、企業には決算書、寄付金の決定プロセス、役員会で決定した場合はその時の議事録を提出することを求めてきた。しかし、こんなことを快く承知する個人も企業もあるわけがない。或る企業の場合、文部省は、その会社の定款では、1,000万円の寄附を決定する権限は誰にあるか、社長であればそれでよいが、役員会で決定したのであれば上記の書類を持ってくるように、と言った。そこで準備室の係が恐る恐るその会社に出向き、そのような書類を懇願したところ、会社側は怒ってしまい、とても出せそうもない金額を無理して捻出したのに、そんな無理難題を言うのであれば、寄付金を返せ、との返答であった。寄付金を返しては大学設置認可をもらうことはできない。とうとう有力者を動かし、非常な無理をして、必要な書類を入手したのであった。

ある日文部省の役人が敬和の準備室職員に「敬和さんほど小口の寄附をたくさん集めている例は珍しいですね」と、率直な感想を洩らしたという。結局のところ敬和は1,323人の個人と、324社の企業・団体から2億7,600万円を集めたのである。他の大学であれば億単位、千万円単位の寄附がずらりと並ぶので、寄付金関係の書類は比較的薄いものになる。これに対して敬和の寄付金関係書類は極めて分厚いものとなった。何人もの敬和学園高校の卒業生や保護者は2,000円、3,000円、5,000円を大学のため献げた。

若い役人が敬和学園大学への寄付金の書類を一枚一枚調べていくうちに、高橋勝名義の300万円と400万円に目が止まった。高橋勝理事長である。牧師の安い給料で700万円もの寄附ができるとはとても思えないので、怪しいと睨んだ文部省は高橋牧師に、銀行の預金通帳を持って出頭するように言ってきた。その日は新潟から設置準備室の長澤職員が理事長につきそって文部省に赴いた。役人が、この寄付金はどういう金であるのかと説明を求めたとこ

ろ、理事長はただ一言、「それは妻の持参金です」と答えた。理事長は病気で夫人を失い、つい何か月前に再婚したばかりだった。高橋牧師は嫁いできた夫人の虎の子の持参金をぽんと大学のために献げて、平然としていたのである。

1989年7月31日が第一次申請書類の提出日だった。29日夜はほとんど徹夜に近い作業であった。長澤職員を含む何人かは車に書類一式（全部を積み上げると75センチの高さになる）を積み込んで関越自動車道を通って東京をめざした。留守居役の2人を除く他の職員は全員、前日に東京の国際文化会館に泊まりこんだ。31日朝の4時すぎに仙沢室長は文部省に行って早い受付番号（企画課1番、私学行政課2番）を確保した。10時の受付開始と同時に敬和の受付点検が始まり、企画課の方は50分程度で完了。ただし平成5年度における総合英語担当者に関する小さなミスが指摘されたが、これはその日の午後に申請書とその抄本40部の中の1頁分を差し替えるだけでよかった。私学行政課の方では点検に午前中かかり、係官が「不備」としてさらに要求した箇所が3カ所あった。その一つは膨大な「寄付行為変更認可申請書」に付けられた新潟県知事の承諾書の日付が7月25日となっていたのを、7月31日付でなくてはならないということで、新発田に電話連絡し、同日午後、市役所の職員が、31日付の知事の承諾書を確保し、上越新幹線で運んで間に合わせた。最も過酷であったのは、申請前ぎりぎりになって、開学時に備える予定の書籍1万7,850冊、計7,700万円分の図書のリストの提出を求められたことだった。紀伊國屋の奇跡的な離れ業で何とかリストは作ったが、そのリストには書物の値段のついていない頁があることを係官に指摘された。そこで仙沢室長と何人かが急遽新宿の紀伊國屋に行き、一室を借りて、数名の店員を動員してそろばんをはじかせ、電卓を叩かせ、ようやくその日の夕方8時頃に書物のリストが完成した。申請書を提出したのは夜の10時20分。当日25の学校法人が大学設置の申請をしたが、中には却下されて涙を飲んだ法人もあった。猛暑のなか、汗みどろになって奮闘した、忘れることのできない1日だった。

1989年秋には大学設置分科会と学校法人分科会のヒアリングを迎えることになる。これが次の関門である。それをいかにして突破したか。次号で語ることにしたい。